月刊

JMITU

ディスカ

さくら連隊12階段

4月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガ　グループ分会　2024 年発行

No,472

2024年春闘
夏季一時金回答

報道では今年の春闘は大幅賃上げラッシュの話題ですがセガの回答は、例年通り制度上の昇給のみです。

会社「昨年大幅なベースアップと報酬改定でかなりの額を上げたので、報道のような賃上げは考えていない。他社より1年早く行っているので金額的には他社より優遇されている。一時金についても利益が出ていないわけではないが、昨年と比べた時に、同じ月数というわけにはいかない。」

セガの昇給は昨年の制度改定より7月になってしまいました。本来であれば4月に遡及してでしたが、昨年より制度改定を理由にそれもなくなりました。

セガの回答

賃金引上げ回答

（一般正社員（Ｌｐ格以下））

基本給昇給分（ステージ変更による賃金改定）（令和６年度基本給テーブル（別表１）、ステージポイント対応テーブル（別表２）による）

基本給　個人評価額　６１４７円

夏季一時金

基本給に係数２．２５を基準とした賞与額

一人平均　７９７６６６円

支給日６月１４日（金）予定

その他の要求には応じられない。

夏季一時金支給額＝基本給×2.25×個人評価係数（別表 3）－　勤怠評価額

＜別表：令和６年度給与テーブル表＞

別表１．基本給テーブル

等級	Gp	Lp	
ステージ	基本給	基本給	ポイント
14	330,100	-	260~280
13	320,600	-	240~255
12	311,100	-	220~235
11	298,600	-	200~215
10	288,900	-	180~195
9	279,200	-	160~175
8	271,300	473,400	140~155
7	266,300	455,200	120~135
6	261,300	437,000	100~115
5	256,300	415,000	80~95
4	251,800	396,800	60~75
3	247,300	374,900	40~55
2	242,800	356,700	20~35
1	238,300	338,500	0~15

別表２．ステージポイント対応テーブル

Lp	R9	R8	R7	R6	R5	R4	R3	R2	R1
8	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
7	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
6	60	40	20	15	10	0	-5	-20	-30
5	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
4	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
3	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
2	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
1	60	60	40	20	15	10	5	0	0

Gp	R9	R8	R7	R6	R5	R4	R3	R2	R1
14	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
13	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
12	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
11	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
10	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
9	60	60	40	20	15	10	5	-10	-20
8	60	60	60	40	30	20	10	0	-20
7	80	80	60	40	30	20	10	0	-20
6	80	80	60	40	30	20	10	0	-20
5	100	80	60	40	30	20	10	0	-20
4	100	80	60	40	30	20	10	0	-20
3	120	80	60	40	30	20	10	0	-20
2	120	80	60	40	30	20	10	0	-20
1	120	80	60	40	30	20	10	0	-20

別表３．個人評価係数テーブル

等級	S	A+	A	B+	B	B-	C
一般職	1.20	1.10	1.05	1.00	0.95	0.90	0.80

SLSの回答

賃金引上げ回答

本給昇給分平均　７１６円

評価級昇給分平均　２３４７円

調整給昇給分　一律４０００円

昇給合計平均　７０６３円

夏季一時金（MS以下）

係数　２．７

平均賞与額　９４６３４７円

支給日６月１４日（金）予定

その他の要求には応じられない。

夏季一時金

支給額＝［資格別基準額（別表３）＋家族手当］×　2.7　＋人事評価額－勤怠評価額

人事評価額＝評価ポイント単価　×　個人評価ポイント　（別表 4）

〈別表１　本給テーブル〉　（単位　円）

年齢	本給	差額	年齢	本給	差額	年齢	本給	差額
18	95,730	650	31	105,580	1,250	44	120,630	1,050
19	96,380	650	32	106,830	1,250	45	121,680	800
20	97,030	650	33	108,080	1,250	46	122,480	800
21	97,680	650	34	109,330	1,250	47	123,280	800
22	98,330	650	35	110,580	1,150	48	124,080	800
23	98,980	650	36	111,730	1,150	49	124,880	800
24	99,630	650	37	112,880	1,150	50	125,680	400
25	100,280	650	38	114,030	1,150	51	126,080	400
26	100,930	650	39	115,180	1,150	52	126,480	400
27	101,580	1,000	40	116,330	1,150	53	126,880	400
28	102,580	1,000	41	117,480	1,050	54	127,280	400
29	103,580	1,000	42	118,530	1,050	55	127,680	－
30	104,580	1,000	43	119,580	1,050	56～59	127,680	－

〈別表２　評価給昇給テーブル〉　（単位　円）

資格	昇給前評価給のレンジ内位置	評価5			評価4	評価3	評価2	評価1	評価0	評価－1
配分割合		個別設定			3%	7%	15%	75%	個別設定	個別設定
MS2	2/3～上限	20,000	～	17,000	14,000	11,000	8,000	5,000	0	−6,000
	1/3～2/3	20,500	～	17,500	14,500	11,500	8,500	5,500	0	−5,500
	下限～1/3	21,000	～	18,000	15,000	12,000	9,000	6,000	0	−5,000
MS1	2/3～上限	14,000	～	12,000	10,000	8,000	6,000	4,000	0	−5,000
	1/3～2/3	14,500	～	12,500	10,500	8,500	6,500	4,500	0	−4,500
	下限～1/3	15,000	～	13,000	11,000	9,000	7,000	5,000	0	−4,000
A2	2/3～上限	10,000	～	8,600	7,200	5,800	4,400	3,000	0	−4,000
	1/3～2/3	10,500	～	9,100	7,700	6,300	4,900	3,500	0	−3,500
	下限～1/3	11,000	～	9,600	8,200	6,800	5,400	4,000	0	−3,000
A1	2/3～上限	7,000	～	6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000
	1/3～2/3	7,000	～	6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000
	下限～1/3	7,000	～	6,200	5,400	4,600	3,800	3,000	0	−3,000

〈別表３　賞与資格別基準〉

MS2	220,000円
MS1	200,000円
A2	160,000円
A1	140,000円

〈別表４　賞与評価ポイント〉

MS2	260	230	200	170	140	110	80
MS1	215	190	165	140	115	90	65
A2	180	160	140	120	100	80	60
A1	160	140	120	100	80	60	40

掌編小説

五十年前の写真

仙洞田一彦

ここは昔からの、この地域の労働組合の事務所だ。幾多の変遷を経て今に至っている。とっくに労働現場も、組合も離れている年寄りも顔を見せる。若い人は、昼間は仕事だからめったに来ない。来るのは年寄りだけだ。

朝から晴れていて、風もない。公園の桜の花もほとんど散って、葉桜に変わりかけている。中小の組合の多いこのあたりは、まだまだ春闘真っ盛りだが、忙中閑ありというか、集会もなければ、団体交渉の予定もないめずらしい日だった。

昼食後、三郎は大テーブルの上に置いたノートパソコンを前にしていた。機関紙の原稿を考えながら、こんな陽気のいい日だから、きっと誰か来るに違いないと思っていた。散歩に出て一休み、そして気ままな会話。急ぎの用事がなければ三郎も話し相手になる。向こうだって何か用事があってくるわけではない。時々返事をしてやればいいのだ。

ドアを押して入って来たのは、敦子さんだった。桜色でもややくすんだ長めのスカートを穿き、明るい桜色のカーディガンを羽織っていた。髪は肩くらいまであった。色は黒。おそらく染めている。

「こんにちは」

「あ、こんにちは」

三郎も挨拶を返した。しばらく見なかったというか、めずらしい来訪であった。ということは、たんに散歩のついでに寄ったのではなく、用事があって来たのかもしれないと思った。

「おめずらしい」

テーブルの向かい側の椅子に腰かけた敦子さんに向かって、声をかけた。

「そうね。久しぶりだわ。何年ぶりかしら」

敦子さんは答えた。三郎も、そんなに経つかなと思った。敦子さんは懐かしそうに部屋を見回して言った。

「変わってないわね」

「変わりようがありませんから、アッハハハ」

三郎は言いながら笑った。敦子さんは三郎の前に置かれたノートパソコンに目をやり、言った。

「お邪魔じゃないかしら」

「夜までに仕上げればいいものですから」

「ああ、そう」

言いながら敦子さんは大きくうなずいた。はっきり、ゆっくり肯く様子を見て、そういえば敦子さんはなんとなく大袈裟な身振りをする人だったな、と思い出した。

敦子さんは、隣の椅子に置いた大きい袋、何バッグというのか知らないが厚地の布でできた袋をのぞき込み、中から大きめの手帳を取り出して開き、はさんであった写真を一枚取り出した。

笑いながら敦子さんは、その写真を三郎の方に滑らせてよこした。

「五十年前のメーデーよ」

「五十年前、というと一九七

四年ですか」
　三郎は手を伸ばし、写真を取って見た。若い男女が写っている。背景には、大勢の人物が向こうを向いて座っている姿がある。向こうには舞台らしいものがある。なるほどメーデー会場のような雰囲気だ。女性は敦子さんだろう。三郎を写真の女性を見て、それから思わず顔を上げ敦子さんを見た。
「若いでしょう」
　敦子さんは高い声で言った。
「ええ」
　三郎は頭で計算しながら返事をした。敦子さんが二十歳だとすれば、いま七十歳か。いやもっと行っているな。三郎より十以上、もっと上のはずだ。一九七四年といえば、三郎はまだ子供だった。
「その隣の男の人、誰か分かります」
　敦子さんが聞いた。そうか、それがここに来た用事か、と三郎は勘を働かせた。
「え、覚えてないんですか」
「ええ、まったく」
「大輔さんですよ」
「大輔さん」
「ええ」
　三郎の答えを聞いて敦子さんは首を傾げた。そして横に振り呟いた。
「大輔さんじゃない」
「ええ」
　今度は三郎が声を上げた。当時の敦子さんと同じくらいの青年は、ここにも顔を出す大輔さんだ。今は禿げ上がって髪の毛がないが、間違いない。敦子さんの記憶がないことに疑問も感じたが、それぞれ違う労働組合だったし、とくに会う機会もなければそんなものかとも思った。無帽の顔ばかり見ていて、たまに帽子をかぶられると「誰？」と思うこともあるからなと思った。
　親しそうに肩を組み、笑顔を浮かべている写真から、当時二人は付き合っていたのだろうかと思った。何人もの男女が肩を組んで歌っているような、先輩の昔の写真は見たことがあるが、二人だけだから、特別な関係に違いないなどと三郎は勘ぐったりした。そして言った。
「もしかすると、大輔さん来るかもしれませんよ」
「え、ここによく来るんですか」
「えっ、まあ」
　三郎は答えたものの、以前来たのはいつ頃だろうと記憶をたどった。ついこの間のことのようにも思うがはっきりしない。近頃来ないなあと思っていると、訃報が飛び込んできたりすることもある。
「こんにちは」
　ドアを押して入って来たのは大輔さんだ。薄手のジャンパーを片手に持って入って来た。歩いてきたから暑くて脱いだのだろう。敦子さんは入り口の方に顔を向けた。
「大輔さん」
「敦子さん」
　敦子さんと大輔さん、二人それぞれ同時に名前を口にした。三郎は、やはり二人は付き合っていたんだと確信した。二人は、はじめからここで会おうと約束していたんじゃな

いか。いかにも偶然出くわしたかのように思わせるが。でも、しかし、そんな風に思わせる必要もないなとも三郎は思った。

「お久しぶりです」

「ごぶさたしてます」

二人は挨拶を交わした。若いころ付き合っていても、歳を経ると、こんな風に挨拶を交わすんだ。なんとなくほほえましい気もした。

三郎の記憶では、敦子さんは夫を亡くしているはずだった。三郎の頭の中で出来上がった物語はこうだ。若いころ大輔さんと敦子さんが付き合っていたが、結ばれなかった。その後二人は別々の人と結婚した。敦子さんは何年か前に夫を亡くした。そして、いま、かつての恋人だった大輔さんとここで出会い……。

「何をニヤニヤしてるんだ」

大輔さんが三郎に言った。

「ニヤニヤなんかしていません」

「そんなことはない。どうせろくでもないこと考えてたんだろう」

大輔さんは大先輩らしい決めつけをした。言われてみればニヤニヤしたかもしれない。

大輔さんはテーブルの上の写真に気付き、手を伸ばして取った。

「それ、大輔さんでしょう」

三郎はすかさず言った。

「久しぶり」

大輔さんが写真に言った。大輔さんは三郎の方を向いて言った。

「よく似てるだろう。兄貴だよ。俺の」

「え」

三郎は声を上げ、敦子さんを見て、また大輔さんを見た。

それから大輔さんはどこかに電話して、敦子さんを迎えに来てもらった。敦子さんは大輔さんにはもちろん、三郎にも何度も頭を下げて、迎えの人と出て行った。この間、どのくらい時間が経ったか分からない。敦子さんと大輔さんのふたたびの恋愛という、三郎の描いた筋書きはまったく狂ってしまったようだ。

敦子さんが姿を消してから大輔さんが言った。

「あの写真は本当に俺の兄貴だ。あの写真の後まもなく、何があったか知らないが、兄貴が命を絶ってね。なぜなのか本当のところは知らん。それから敦子さんは敦子さんの人生を送った。最近聞いた話では、敦子さんはあの写真を持ち歩いて、この人は誰だと聞いて歩いているようだ。認知症なのかなあ。聞いても、聞いても忘れる。忘れるから、この人誰かと人に聞く。敦子さんにとって、兄貴のことは消し去りたい記憶でもあるし、消してはいけない記憶でもあるのかなあ」

三郎に言うというよりも、独り言に近い言い方だった。

「ふうん」

三郎もそう言っただけだった。一呼吸置くと、ノートパソコンに向かった。でも指は動かなかった。